

幼児の絵画製作についての

いろいろな問題

林 健 造

一、はじめに

去る六月六・七・八日の三日間、恒例のお茶の水女子大付属幼稚園の研究会がおこなわれたが、その第三日目、絵画製作の分科会でいろいろの問題が討議された。ほとんど全国から参加された会員の熱心な話し合いは、この道の探求者にとって、大きな示唆と励ましになった。

この稿は、その日に討議されたいくつかの問題を中心に取上げ大方の御意見も参考にし、また私見も入れて私どもの共通の悩みとしての問題について述べることにしよう。そして誌上を通して、参加者だけ

でなく、より多くの誌友へのお知らせとしたい。

一、幼稚園と小学校との関連

絵画製作という問題についての幼稚園と小学校のつながりは、他の教科などと比べて、造形あそびという形からは非常に素直なつながりをもつべきはずであるのに、案外、この方がむずかしいらしく、どちらかというと明るい話題よりは、暗い話題の方が多いようである。

たとえば、幼稚園の先生は「せっかく、園では、子どもたちの造形的な欲求をみたしてやることに重点をおいて、自由で、の

びのびとした表現ができるように」ということで一生けんめい育ててあげたのに、小学校では、型にはまったような絵や工作ばかり、しかもどうも一年担任の先生のよいという絵は、創造性や迫力のない、きちんとした絵であるらしい。本当にがっかりしてしまった」というようなことをしばしば言いかされる。

そうかと思うと、小学校の先生の方にも、それなりの言い分があって、

「幼稚園からきた子には困ってしまう。どの子どももチューリップ病におかされている。描くものはお人形のような人と、チューリップとときまつたような型にはまったような子が多い。これを概念くだけからやり直すのだから並大抵でない。幼稚園ではもっと自由な、のびのびした子どもの表現を励ますべきだ。」ということになる。

この「隣の柿はにがい」という逆説めいた論を吐く先生がたは、どちらかという

進歩的な、あるいはごく熱心な型に属する先生がたに多い。

このことは、美術教育観やその人のもっている造形感覚によって大きく違いがおこってくるわけであるが、後者の感覚の問題は、やはり、いろいろの展覧会や教科書や、最近よく使われている週刊誌の表紙の児童画などのよいものを、実際に自分の感覚を通して、数多くみるなどして、子どもの造形の観賞眼を高めていく以外手がない。

前者の場合は、こんどの改訂指導要領の小学校図画工作科の目標第一条の

「絵を描いたり、ものをつくったりする造形的欲求を満足させ、情緒の安定を計ることがよく幼児及び一年生のねらいを表現していると思う。」

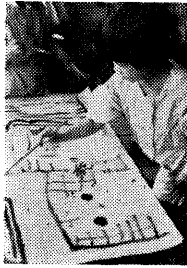
人間にとって何が大切かときかれれば、それは、自己表現ということだと思う。幼児にとっても、できるだけ、子どもたちがもっているものを、自由に吐き出させるよう

に刺激と励ましを与える方法が少なくも進歩的美術教育のも早や一般化された考え方であろう。

実は幼稚園でも小学校でも案外その子どもが活動している場の内容を知らないからであることも多いので、できれば両方から暇をみて、進学の前後などに見学し合い、きたんなく話合う機会をもたれることがのぞましいと思うし、なんとかこの問題に関しては、明るい話題がもてるようにしたいものである。

二、絵を習わせることの是非

幼稚園の先生と小学校の先生との言い分と同じように、こんどは学校の先生と画塾



の先生との論争もあるようで、与党である園や学校の先生がたは、

「子どもを画塾に習いに出すと、妙なくせを覚えるし、それに子どもの欲求とは何の結びつきもないウイスキーの瓶の写生などをさせたり、勝手に加筆したりして、全くよろしくない。それに近頃子どもたちは依頼心が強くなり、先生どう描くの、とか、バックは何色などときいてからでない」と描かなくなった。」

などという目ら野党と称している画塾の先生がたも負けてはいない。

「子どもは実にすばらしい輝やく真珠のような力をもっている。掘りだせばいくらでも掘り起せる。ところが学校では、あの子の才能を掘出すどころか、ひからびた指導しかしていない。」

この両者共指導者としては熱心なタイプである。しかし一般には、それほど関心をもちたくないタイプや、目にあまる金とり主義のいい加減なものか、または、絵は絵のう

まい俺の所で教えるのが何がわるい、という頑固な教込み型があるが、これは困ったことである。

私などは、画塾をしばらく見学して、子どもといっしょに遊んでくれるような、子どものもっているものを大切にしてくれるような先生なら習わせてもいいでしょうといっている。

ほんとうによい塾の先生のところに通わすと、案外お母様がたの期待に反した、何もおみやげ作品をもって帰らない日が多いことになるのではなからうか。ここに絵を習わせることの是非につながる親の希望が問題になってくる。

親の虚栄のために(見栄型)、自分でできなかったことをせめて子どもで果して満足したい(願望すりかえ型)、「芸」ことは早い時期に教えないとだめだから(錬鉄型)、唯遊ばせておくよりもよいから(余暇善用型)、などいろいろあるだろうが、最も望ましいのは、すきな絵を自由に描けるというふん



囲気や絵を描くことはとても楽しいと思うようになるようにという態度であろう。

音楽や国語や算数のような記号学習を中心とするものと違うので、教師が描き方を教えこむことによりおとなくさいうまい絵は描けても、子どもの真実を吐露したよい絵は育たない。

おもしろいことに、この問題で、幼稚園の先生の中には、週一、二回画家を講師として絵画製作を依頼している、近頃よくお

こなわれている方法の問題として取あげられたかが二、三あった。これとて理由は、私たちは絵が描けないから、専門家に指導してもらおうというようであるが、これもその教師によるようで、やはり根底には、美術の教育という考え方が先行しているからであろう。もしも美術を通しての教育という考え方からは、指導者は必ずしも専門画家である必要はなく、むしろ絵がうまく描けることよりは、子どもの心理をよく知っている人、子どもといっしょになって遊んでやれるといったような人が事実成績も上げていこうである。

それに私にも経験があるが、一週間に一回くらいぼつと行っても、子どもの園の生活をしらないでは、全く生きた絵の指導はおぼつかない。

三、ぬり絵のこと

幼稚園の絵画製作の研究会で最も話題になる問題というと、まずぬり絵のこと、

折紙のことである。

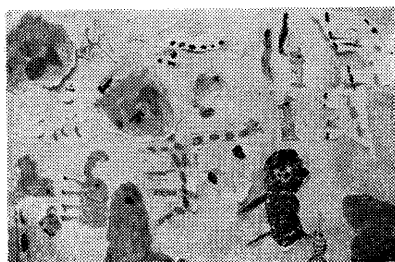
「今ごろぬり絵をしているなんて。」

ということになるわけである。これには多少とも冷笑が含まれておるが、何かいつも同じせりふだけをきいていると、〇〇の一つ覚え”といった感もないではない。

一体ぬり絵が悪いというのは、人間にとって最も大切な力で子どもの生来もつているところの創造力の芽をいためるということにある。おとなの描いた、あるいは市販の卑俗なぬりえは、むしろ創造衝動よりも、模倣衝動を生きいきとさせることであり、教育的な益が少ないというより、もっと悪であるということになる。

ぬり絵論は今、次の三つの立場に分けて考えることができる。

- 1 ぬり絵絶対廃止の立場
 - 2 ぬり絵賛成の立場
 - 3 ぬり絵も教育の方便として、時機に応じて認められるべきだという立場
- ①の立場については、創造主義教育的な



考え方に立っている大方の人はこの論である。②については、旧来の頑固な人か、非常に怠慢な教師ということになるが、よい意味で、このぬり絵の価値を考えてみようという立場がある。きくところによると、ソ連などではぬり絵を教育の中にとり入れているといわれている。これなどは、美術教育を認識過程の為の美術というソ連のモットーをいかし、新写実主義などとも結びつけた、新しい角度からの採入れに違

いない

ところで③の場合である。お茶の水の研究会で問題になったのは、まさにこの③の場合であろう。実は私も旅先から当日帰ったばかりで前日の発表の実態を見ていない。しかし後にきくところによると、体育ダンスをするためのお面を、年少組や年長組の混合の子どもたちに作らせたのであるが、年長の子には、それぞれ自分でお面を作らせたので文句はないが、年少の子には、教師が形どったリスに色をぬらせたものをつくらせたということである。

ここに先に述べたいわゆるぬり絵探しの眼がそそがれて、槍玉にあがったわけで、さてこそと鬼の首でもとったような気持ちになることはわからないこともない。

当日園長は次のように答えている。

「昨日の場合、四才児でつい二た月前に入園したのもあり、子どもが簡単に表現できるものもあり、なかなかイメージの中からでてこないものもある。リスは子ども

身近にないので先生がリスの形を用意しておいて材料を渡した。先生のねらいは、勿論、子どもの創造性を伸ばすことにあります。それはいろいろな過程があると思えます。……」

この答は、まさにその通りで、一つの教育観を明解に示していると思う。

レディネスの問題ともいえようし、またこれは用を含んだデザイン学習の形によく似ている。デザイン学習の場合、もうつくりや、形ぬり、形のこしのしごとなどは一種のぬり絵である。用のためのデザインでは、やはり学年の発達段階に応じて、ある程度の用意が必要なのはしばしばある。この場合なども、みんなでダンスをおどるのにどうしてもリスが必要だったのであろう。

一さいのぬり絵は悪だ、いかなる保育活動の中の少部分といえども許せないという考え方も成立つことも認めるが、しよせん、これは教育観の違いである。

私なども日頃、教育主義というか、学校主義というか、もっと学校や園に密着した美術教育というものの誕生を痛感している一人である。

このような観点から民間美術教育の論と実践に敬意を表しながらも、いかに教育現場のレールにのせるか、園や学校の中ではどう考えるかという、近視眼的でない、巾のひろい、場に即応した考えをとりたいたいと念願している。

今、静かに考えてみると、ぬり絵を質問された方も、答えた方も、正しい立場に立ってそれぞれの見、か、いを述べておられたものであって、そのために、軽くあしらわれていたぬり絵の問題一つにせよ、多くのまだ未解決の世界について、真剣に考えるときを与えていただいたことは、一つの収穫であったのではなからうか。

* * *

幼児の教育 第五七巻 第七号

十一月号 © 定価 五十円

昭和三十三年十月二十五日印刷

昭和三十三年十一月一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌の購読についてのご注文は発売所 フレーベル館 にお願いたします。